様式第２号

平成２７年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２８年３月３０日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td colspan="2">保健福祉学科</td><td>職 名</td><td>講師</td><td>氏 名</td><td>周防　美智子</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="7">児童生徒の抑うつ状態と問題行動　―追跡調査による検証―</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td colspan="2">所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td colspan="2">役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>周防美智子</td><td colspan="2">保健福祉学科・講師</td><td colspan="2">社会福祉</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>分担者</td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="7">1.研究目的・方法
近年の児童生徒の問題行動増加に対し、問題行動の要因を明らかにすることが急がれる。児童精神医学領域では子どもの問題行動を抑うつの視点から検討することが必要だと指摘している。そこで、筆者は2009年度から2013年度にかけ、問題行動を抑うつの視点から検証してきた。そして、2014年度から、これまでの研究結果を発展させ、児童生徒の抑うつ状態と問題行動の関連が環境や発達年齢の影響によってどのような変化を表すかを検証し、抑うつ状態と問題行動の改善に向けた支援を検討するための追跡調査を開始した。
本研究は、2014年度調査対象であった小・中学生を今年度追跡調査し、抑うつ状態と問題行動の実態把握と検討を行った。調査は、Birlesonの子ども用自己記入式評価尺度（DSRS-C）と、教師の行動評価（①行動が年齢より幼い、②座っていられない落ち着きがない、③やってはいけないことをしても悪いと思わない、④暴言や暴力がある、⑤物を壊す、⑥学習意欲がある、⑦休み時間の友人交流がある、⑧学校生活全般に元気がある、8項目）を質問紙で行った。DSRS-Cは、フルスコア36点でカットオフスコア16点以上を抑うつ状態とする。対象は、A県3小学校の児童1年生から6年生1,558人と1中学校の生徒1年生から3年生785人および担任74人である。調査は、6月と11月に2回実施した。分析は分析ソフト（SPSS20.0）にて、有効回答（小学生1回目1,538人・2回目1,537人、中学生1回目723人・2回目742人）を対象に行った。本研究は、岡山県立大学倫理員会の承認を受けている。
2. 研究結果
分析対象の内訳は、小学生の1回目対象は、1年生175人、2年生163人、3年生287人、4年生288人、5年生312人、6年生313人の1,538人で男子768人、女子770人であった。2回目の対象は、1年生174人、2年生156人、3年生284人、4年生301人、5年生309人、6年生313人の1,530人で、男子773人、女子764人であった。そして、中学生の1回目対象は、1年生240人、2年生257人、3年生226人の723人で男子365人、女子361人であった。2回目の対象は、1年生237人、2年生254人、3年生251人の742人で男子373人女子369人であった。</td></tr>
</table>

調査研究実績の概要

DSRS-Cの平均得点及び標準偏差は、小学生１回目調査は、8.89±5.58点、2回目は8.84±5.51点であった。そして、中学生1回目調査は10.11±6.08点、2回目は10.48±5.83点であった。カットオフスコア16点以上の抑うつ状態を示す小学生は、1回目調査では、1,538人中197人（12.8%）、男子全体の13.9%、女子は11.7%、2回目は、1,537人中190人（12.4%）、男子13.5%、女子11.5%であった。中学生は1回目調査では、723人中135人（18.7%）、男子17.3%、女子19.9%、2回目は、742人中140人（18.9%）、男子18.5%、女子18.7%であった。抑うつ状態を示す小・中学生を学年別に表１に示した。調査対象3小学校で、抑うつ状態を示す児童に大きな差は見られなかった。

表１　DSRS-Cの得点が抑うつ状態を示す小・中学生（%）

	小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
1回目	7.1	21.6	15.3	10.4	10.3	16.0	12.1	16.0	28.8
2回目	10.9	13.5	12.0	10.6	12.0	15.0	11.0	21.3	23.9

また、カットオフスコア16点以上と行動を重回帰分析したところ、小学生では、『座っていられない落ち着きがない』『いけないことをしても悪いと思わない』『暴言や暴力がある』『学習意欲がない』などの項目に関連がみられた。中学生では、『行動が年齢より幼い』『暴言や暴力がある』『休み時間の友人交流がない』などの項目に関連が見られた。

さらに、1回目調査で抑うつ状を示した小学生91人のうち、51.8%となる46人が2回目も抑うつ状態を示していた。中学生では、1回目調査で抑うつ状態を示した135人のうち78人（58.3%）が2回目も抑うつ状態であった。学年別を表２に示した。

表2　1回目調査抑うつ状態で2回目調査も抑うつ状態を示す小・中学生（%）

小1年	小2年	小3年	小4年	小5年	小6年	中1年	中2年	中3年
33.3	41.4	43.2	60.0	68.8	54.0	34.5	73.2	58.5

3. 考察

抑うつ状態を示す小・中学生はどの学年にも存在し、抑うつ状態が行動に影響している可能性が示唆された。抑うつ状態は、小学生より中学生に高くなる傾向が見られる一方で行動の表面化は低くなると考えられる。

また、1回目調査抑うつ状態で2回目調査も抑うつ状態を示す小・中学生は、小学4年生以上のほとんどの学年で半数以上に見られ、抑うつ状態が継続している可能性が考えられる。性別と抑うつ状態の関連では、一般的に女子が男子より抑うつ状態を示しやすいと言われているが、小学生においては男子が少し高く、中学生では女子が少し高くなる結果が見られた。筆者の今まで小学生を対象とした調査では、男子の抑うつ状態が女子より高く見られたことから、今後児童期における抑うつ状態と行動の特性についても検討を深める必要があると考えている。また、中学生女子の抑うつ状態が男子より高くなる傾向については、抑うつにおける医学的な性差の特性を示しているものと考える。本調査については、さらに分析を進め抑うつ状態の視点から問題行動の検討を行う予定である。

成果資料目録	平成28年度　学会発表および論文投稿予定